

## 「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第25陣

### 参加者の感想（抜粋）

#### 【第1分団：医学】

○日本の高齢化率がとても高い。このような現状に対し、医療機関やメーカーなど各方面が積極的な措置や対応を取っている。医療、介護、セミナー、ATC エイジレスセンターなど分団テーマに基づいた活動を通して、社会が高齢化社会に直面した時にどのような措置を取るべきか理解できた。中国でも高齢化の問題が顕在化しつつあり、日本の経験から学べるものが多い。東京女子医科大学への訪問は、日本の医学生と直接交流する機会が得られ、同世代、同じ専攻を学ぶ学生の学びや生活を知ることができ、見識を広め、お互いに友情を深めることができた。京都大学への訪問で得たものは大きく、一流大学としての歴史、学術レベル、文化伝統を理解しただけではなく、本庶佑医学部教授による腫瘍免疫に関する素晴らしい講義を受講することもでき、大変印象深かった。

○日本の医療に対する一番の印象は「人間本位」という点である。例えば「在宅医療」の概念と理想は、実に興味深い。なぜなら私も、医療の最大の目的の一つは生活の質を向上させることにあると思っているからだ。ヒューマンケアをより一層、重視すべきだ。日本は理念上に限らず、人間本位の製品や施設をたくさん作りだし、あらゆる面から、国民の生活をサポートしている。私は、自国もこの道においてまだまだ努力しなければならないと感じた。

日本の大学の自由な雰囲気も私にとって憧れだ。名利のために好きでもない研究をしなくてもよいことは私の理想である。今後、日本の大学へ留学する機会があったら希望したい。

○今回の訪問の中で、最も印象深かったのは明日香村でホストファミリーと1日交流したことだ。日本の一般家庭への宿泊は初めての体験で、そこで幸いにも日本の伝統的な家庭料理やデザートづくりを体験した。私たちを受け入れてくれた家族はとても純朴で、ホスピタリティーに溢れ、我々に対し心を尽くしてもてなし、交流してくれた。これこそまさに日本国民の縮図だった。この人生にとって忘れがたい体験を、すぐにでも中国にいる家族や友人に伝えたい。

自分の周りの家族や友人の多くは、日本や日本人に対する理解は伝え聞いた噂話に頼っており、日本に対し反発する気持ちがまだ相当ある。私は帰国したら、日本で見た清潔な道路や、あらゆるところにあったハイテクな施設、極度な人への思いやり、大学教育や科学研究において弛まない探究心、現地の人々の親切心とホスピタリティーを彼らに伝え、この国の本当の姿を理解してもらいたい。中国人は日本人と似通っている部分が多く、また日本人から学ぶべき優秀な点がたくさんあると知ってもらいたい。

○今回の訪日活動は、内容が豊富で、準備も行き届いており、多くの収穫が得られた。例えば一般家庭で男性は家事をやらない、日本料理の精巧さなど、一部見聞きしたことは想定内のこともあったが、予想もしなかったことは更に多かった。いくつか印象深い点について述べたい。

数日で感じた最も印象深いことは、日本の豊かさだ。日本の豊かさは、いくつかのグループ会社

や大家族に限らず、普通の国民一人一人が、その豊かさを享受できている。公共施設においては、農村に居ながらも便利に買い物ができ、医療や教育を受けられている。貧富の差が比較的少ないことによって、どんな職業でも高い生活レベルを維持できている。一つの国家で数人が裕福になることは難しくないが、貧しい人が一人もいないという国は、世界でも稀である。もちろん日本がこの点を実現できたのは、国の規模が小さいことや人口が少ないことに起因する部分もある。

次に印象深かったのは、日本人の徹底的に追究する性質である。町の隅々まで清潔で整っていることや、生活の中にハイテクな製品が溢れていて、故障して無駄に場所を取っているものがほとんどなく、また、一つの空間や一つの物すべてが最大限の役割を果たし、無駄がない。これらは我々にとって最も学ぶべき点である。中国は近年、国民の物質的な生活が急速に豊かになった反面、ソフト面が追い付かない上、人々の意識も足りないため、このような発展は荒っぽく浮ついた印象がある。日本人の徹底的に追究する性質は、訪日中に経験した小さなことにも表れている。例えば、訪問先のテルモが我々のために集合写真を用意してくれたことや、事務局から受け取ったしおりにすべての注意事項やそれぞれの訪問先の地図を載せていたこと、また、日本人の時間を厳守するところなどである。もちろん、極端なルール化の反面、人々は多かれ少なかれ放縦さや、荒っぽさを失っている。その良し悪しは哲学の範疇の問題かもしれない。

最後の印象深い点はとても簡単だが、日本人が自由に好きな専攻や学業、仕事の方向を選べる点である。普通の人でも豊かに暮らせるので、多くの精力を費やして学業の頂点に上り詰める必要がなく、昇進のために好きでもない研究をしなくても良い。世界の本来の姿はこのようにシンプルであるべきだ。私はこのような「好きなことをやり、人類に有益なことをやる」世界に強く憧れている。

○東京女子医科大学、京都大学及びテルモメディカルプラネックスの訪問で、私たちは日本側の先生や学生と、再生医療工程の構築、腫瘍免疫治療及び臨床シミュレーションの設備について意見交換した。これは医学の代表団として大いに喜ぶべきで、積極的に交流でき、最も反応が良かったプログラムだった。科学技術には国境がなく、知識の交流は皆にとって、とても感慨深いものだった。大学生及び医療センターの技術者との交流では、私たちは中国と日本は科学技術のある分野において大きな差があることに気づいた。それと同時に、両国の青少年が知識を探究する仲間として共通している部分もあることを発見した。

○1. 日本人は時間を守り、礼儀正しく、思いやりがある。正確な日程表及び豊富な参考資料（施設の平面図など）を受け取った時から、日本人の時間の正確さや効率を重視する点を感じた。このような緻密さと一つのことに専念する力は、日本の先端技術の発展に寄与した重要な要素だろう。礼儀はお辞儀や敬語だけに限らない。最初、堅苦しく訳がわからないと思った（訪日中の）行動のルールは、実は思いやりの心を表していた。ある意味自発的で、形式に流されない礼儀のよさは、例えば公共の場では静かにすることや、エレベーターや道路では常に向こうから来る人のために道を空けておくこと、温泉に入る前に座ってシャワーすることなどに見られ、新幹線に乗る時に荷物を別送してくれたことや、食事が中華から和食へ徐々に変化していく心遣いなど、思いやりはあらゆる細部に表れている。

2. 先進な医療技術と理念。帰国したら、医療専門の関係者と cell-sheet based tissue engineer や pp-1 技術及び臨床応用について意見交換をしたい。テルモの hospital studio の内容を、中国の医学生と共有したい。また、家族の年配者に介護体験や ATC エイジレスセンターで見た各種の医療福祉設備を紹介し、彼らの生活の質の向上に役立たせたい。

3. 日本の風習。精巧な日本料理、厳かな寺院、格調高い住宅、快適な温泉、親切な国民などなど、家族や友人にたくさんのことを伝えたいし、たくさんの写真や手紙、経験を分かち合いたい。

○今回の訪日はとても忘れ難く、書くべきことで溢れている。最も印象深かったのは京都大学訪問で、その次はホームステイだろう。ある土地を訪れた時、そこにある大学を訪問することが、私は最も好きだ。外部に干渉されず、自由に満ち、人間の形跡すら感じないくらいの学術の雰囲気、私は最も憧れている。今回は日本の京都大学を訪れ、入り口に置かれていた学生たちが書いた自由な言論の立看板に目を奪われた。席に座り、先生から大学についての紹介があり、ある言葉に深く感銘を受けた。「日本人は一つのことに対し、徹底的に追究する性質をもっている。中国人は1年以内でビルを3棟建て、一方日本人は1年でワンフロアしか建てないかもしれないが、でき上がった建物は必ず芸術性と実用性を持ち合わせ、地震や災害に耐えうる能力も強いだろう。同じように、日本人は学術研究においても、何十年を1日の如く一つの研究に打ち込める。しかし、一旦この研究ができ上がれば、おそらく世界のどこのチームももう二度と、同じ分野について研究する必要はない」。これは、とても考え深い話だった。私は帰国後に、周りの同級生にこの精神を伝えたい。中国の医学研究ではSCIを重視しているが、私たちはもっと着実に品質の追求に力を入れなければならない。このように一つのことへ専念する精神は、学術に対してだけでなく、患者に対して、更には言えば人生に対する態度でもある。まず私自身が行動を起こし、上辺だけで成功を急ぐ心理を捨てなければならない。自分が書いたものや、患者に出す処方すべてをどれも根拠のある、信用できるものにしたい。また、家族や友人に、生活に対する真面目な態度が必要であることを伝えたい。私たちを受け入れてくれたホストファミリーの家や庭、道路の横の隅々には「景色」があった。お爺さんとお婆さんの家の庭にある路地の両側に、それぞれ異なる品種の小さな花々が植えられていて、一枚の絵のようだった。これこそ生活への愛着の表れである。将来、自分の家もこのようにしたいと思った。とにかく、今回は日本の高度な文明や先進的な文化を体感することができた。私たちはまだまだ学ぶべきものが多い。今後日本へ留学し、更に研究を究めたい。

○今年1月、幸いにもJENESYS2.0事業に参加し、2016年初めての中国大学生訪日団の団員として日本を訪れた。わずか1週間の中で、同じ専門分野の学者や青年の学生と交流し、同分野の有名企業を視察した。また、日本の古くて由緒のある寺を参観したり、仏教文化を体感したり、日本の農村でホームステイし、ありのままの日本の生活を体験した。そのほか、東京タワーや皇居を参観し、温泉を体験し、伝統的な日本料理を味わい、日本文化について理解を深めた。日本にいる毎日はとても充実しており、見たもの聞いたことのすべてが新鮮だった。しかし、最も印象深かったことは、やはり日本人の緻密さや生真面目さである。訪問中、すべてのプログラムが始まる前、日本側スタッフは再三その内容や注意事項を繰り返し説明した。中国出発前と日本到着後に、詳細な説明会を実施していたにも関わらず、である。京都大学では、70代の教授が開始15分前に会場に到着し、用

意された講義の PPT 資料は国際学術会議での発表に少しも劣ることがなかった。ノーベル賞にノミネートされている著名な教授が、私たちのような若者に対しても手を抜かず、真面目に対応してくれるとは思ってもよらなかった。大阪の ATC エイジレスセンター訪問では、車椅子や、お風呂や自動車の電動昇降椅子、さまざまなウォシュレットだけでなく、セラピー用アザラシ型ロボット、パソコンのキーボード、食器と箸に至るまで、高齢者や障害者への思いやりを感じるデザインに溢れ、日本人の緻密さを表していた。「日本人はやることを徹底的にやる」ということは、7 日間の交流を通じた日本人のイメージである。帰国後、周りの家族や友人に日本で見たことや聞いたこと、感じたことをありのままに伝え、日本の人々の友情を、より多くの人に伝えたい。

## 【第 2 分団：経済・経営】

○日本側の入念な手配の下、アベノミクスについてのセミナーを聴講した。今までアベノミクスについて、ある程度知っていたが、そのほとんどは円安など金融政策についてだった。今回のセミナーを通じ、アベノミクスの考え方について、比較的包括的な理解ができた。日本は政府が介入する資本主義国家であって、70 年代の産業政策によって発展してきた。しかし後から続いて、少子高齢化の問題が起こった。中国は経済の発展が遅れ、多くの経済政策が日本から影響を受けた。私たちの未来は、これから多くの同じような社会問題を直面するだろうし、政策は循環型経済への持続的な影響を総括的に考える必要がある。中国の発展計画は、目の前の問題のみに着目せず、人類や社会全体に責任を負わなければならない。

○日本は古代の儒教文化をととても合理的に継承し、それは人対人、人対社会、人と自然の関係、この 3 つに特に表れている。

まず、人と人との関係がととても礼儀正しく友好的で、同時に秩序を重んじている。私がホームステイした奈良県明日香村の家庭を例に挙げると、一家はととても親切でフレンドリーに接してくれ、家族間の仲もとても良かった。一方、目上の人に対して格別に尊敬しており、食事の際、お爺さんはいつも上座に座っていた。「父は子を慈しみ、子は父に孝行を尽くし、兄は弟を友愛し、弟は兄を敬愛する、此れ固より人倫の幸福」である。

次に、個人が社会に溶け込んでいる。一人一人が社会的責任を負っており、それは例えば交通規則を厳格に守る、公共の場では大きな声を出さない等、細かい点に表れている。その責任感は、またしも「天下のことが己の責任なり」という社会を思いやる精神に表れている。例えば、あちこちにあった被災地の人々のための募金箱を見てもわかる。

最後に、人と自然の関係は調和が取れている。日本の地に足を踏み入れた途端、「此処には高山峻嶺あれば、青青と生い茂る林や長く伸びている竹もある」という感想が脳裏によぎった。このような人間と自然が調和した関係は、日本人の自主的な環境保護と、資源を大切にしている意識によるものだと感じた。例えば、日本人がゴミの分別や回収、再利用を厳格に行い、ゴミをポイ捨てする人がほとんどいないことだ。

以上が、私の伝えたいことである。

○今回、現代的文化建築、企業、先端技術館、歴史的文化施設の参観など、さまざまなことを体験

した。その中で、最も特別だったのは間違いなく日本の大学生や一般家庭と交流の機会をたくさん持てたことで、大変幸運だった。更に貴重なことは、言葉が十分に通じない中でより純粹でシンプルな交流の方法、まさに心と心を通わせたことである。

日本と中国は同じアジアの国として、遡れば文化の起源が同じである。「地球村」の確立により、現代文化の発展においても持ちつ持たれつの関係にある。私たちは日本の大学生とアニメやポップミュージック、世界風情等の話題に花が咲くこともあれば、下宿先のお母さんに折り紙や料理、日本の成人式について教わることもある。私たちは同じく韓流スターに憧れ、地球環境の問題に関心を寄せる。「送別」の歌を鼻歌で歌っていると、彼らの脳裡に浮かんだのは「旅愁」の曲だ。中国と日本は古き時代から、交流や往来を断つことがなかった。

特に言及したいのは、ホームステイだ。たった1日だったが、私が滞在した部屋は至る所に心を込めて飾り付けがされ、目立たない隅っこであっても、特別な小さな工芸品が飾られていた。家中が緑で溢れていたことは、もはや言うまでもない。その人を見るには生活する部屋を見ればよいと言うが、プライベートな空間はその人の内面を表している。

利益の問題を除けば、一般庶民はただ普通に生活しているだけであって、人生を愛し、善をなしている。我々が友人になり、平和に付き合っていくことはきっと自然な流れであろう。

○今回の訪問で最も印象深かったことはグリコの工場視察と、明日香村のホームステイの2つである。

グリコの工場を見て、日本の製造業、加工業が大変発達していると感じた。日本は製造加工に対する態度が極めて厳格で、慎重である。機械化された加工工程でも、重要な箇所は人を配置し、間違いや漏れがないようチェック体制を取っている。グリコは企業文化の発信と伝承にも力を入れている。創業者の生い立ちを対外に発信する方法は、企業文化を宣伝するにあたってとても有効的である。中国の企業も参考すべきだ。

明日香村は私にとって人生で忘れ難い場所になった。飛鳥時代から現在まで1300年あまりの歴史を有し、風景はまるで絵画の如く、人々は善良である。私たちを受け入れてくれたのはN一家だった。N家には、お爺さん、お婆さん、お父さん、お母さんと一人娘がいた。そこで、私は日本の伝統的な家族構成や家庭の雰囲気を知ることができた。人々が善良で、裕福に暮らしていることが、ホームステイから受けた一番の印象だった。

中国に帰ったら、宮崎駿先生が描いた美しい風景は日本の原風景であることを大声で伝えたい。日本は町が清潔で、国民が礼儀正しく、時間を厳密に遵守することは、尊敬に値し、学ぶべきである。歴史はいずれページを捲らなければならない。国家間は前向きに付き合う必要がある。中国はゆとりのある社会づくりに向けて、日本の先進的な部分や優れている文化をまだまだ学ばなければならない。また、心から日本の人々が中国を訪問することを歓迎する。

朋あり遠方より来たる、亦楽しからずや。

○私たちは行程中、中央大学と同志社大学を訪問した。中央大学では、学生たちが自分で運営した「Happiness」というプロジェクトの紹介を受けた。日本で不要になった衣服をフィリピンに売り、それで得た売り上げを、フィリピンの子どもたちの就学を経済的に援助するものだ。これは公益目

的の商業モデルであり、彼らはわざわざフィリピンへ行き、プロジェクトの運営に向けて調査を行った。しかも、短期間で同プロジェクトを軌道に乗せ、拡大させた。同世代の彼らは、我々が想像できても実行できなかったことをやり遂げた。自分たちの力で社会にそして世界に貢献し、夢を実現させていて、大変すばらしいと思った。以前、私も AIESEC という組織に入って公益活動をしたことがあるが、彼らのように着実に実行できなかった。小さなプロジェクトであっても、実行すると困難は多い。本当に彼らには敬服した。

同志社大学はキャンパスが美しく、外国人が多い。先生が紹介してくれた国際的な Global MBA プログラムに心を動かされた。いつか日本へ留学できたらと思う。

○私はビジネスマネジメントを専攻している。グリコ株式会社での見学がとても印象深かった。例えば、1930 年早々に自動販売機で映画を放送するというセールスの手段を思いついたことや、実店舗より 2 銭安い値段で商品を提供し、販路を拡大させたことなどだ。生産ラインは全て自動化され、働く人は箱を機械の上に置くだけでよい。24 時間生産の 3 交代勤務体制で、広々としたグリコの工場には、たった 600 人程度の従業員しかいない。科学技術が人力に取って代わった現実と日本の科学技術の進歩を、身を以って体験した。

中央大学で学生によるプレゼンテーションを聞き、これこそ真の大学だと感嘆した。商学院の学生の 1 人として、理論を学ぶと同時に実践で経験を積むことも非常に重要である。経済学部の学生は中古の衣服を集めてフィリピンまで届け、4P 理論を応用して低い価格で販売し、更に販売で得た利益を寄付することで、資源も節約でき、現地の貧しい住民を助けることができた。そして、学生たちは企業マネジメントのノウハウを手に入れた。

このほか、同志社大学の学生たちと情熱に溢れた交流を経験し、大学の美しいキャンパスを参観したことも、日本へ留学したいという気持ちがかきたてられた。

○中央大学で交流した時、1 人の日本人学生と 1 人の中国人学生に出会った。交流の最後に、日本人学生が中国人学生に通訳を頼み、「中国と日本の間には好ましくない報道がたくさんあるが、それはごく少数の人の考え方であり、多くの方はあなたたちと良い友人になりたいと思っている」と言ってくれた。この言葉は深く私の心に刻まれた。今まで耳にした中日友好に関する無数の言葉よりも重かった。なぜならそれが民間からの、真の声だったからだ。私は、訪問の全行程において日本側の友好を深く感じた。中国経済は日本経済と持ちつ持たれつの関係にあり、まさに「一衣帯水」の言葉通りだ。私たちはお互いに偏見を取り除き、相手を受け入れ、オープンな態度で未来と向き合っこそ、より良い発展を遂げることができるのだ。

○最も印象深いのは、明日香村に訪れた日のことだ。その日はとても寒く、明日香村の村民たちは早々に集合場所に集まり私たちを待っていてくれた。最初の交流の後、すぐに親密な関係を築けた。村民たちは全力を尽くして地元が一番美味しいものでもてなしてくれ、日本の起源である遺跡を案内してくれ、お団子の手作り体験もさせてくれた。お団子はとてもシンプルに見えるが、細部まで注意する点がたくさんある。自分で作った団子を平らげた後、聴いた日本の伝統楽器の演奏は大変静かで美しかった。彼らとはわずかな時間しか一緒にいらなかったが、お互い名残惜しかった。

別れる時、明日香村の村民たちが何度も涙をぬぐい、バスに乗り込んだ私たちも泣き崩れて窓から外にいる日本のお母さんとお父さんを見つめていた。機会があれば、必ずもう一回彼らに会いに来たいし、彼らにもぜひ中国へ来ていただき、中国の伝統文化をお見せしたい。

中国に帰ったら、私はきっと日本は美しすぎたと言うだろう。気ままにシャッターを押すたび、風景があり、フィルターを加える必要などなく、あちらこちらから日本独特の美が滲み出ていた。また、日本国民はフレンドリーで可愛らしく、包容力に溢れていた。違う国や肌の色の人が行き交い、多様な宗教や建築様式が共存している。最後に、私が非常に敬服しているのは、彼らは周りの人に迷惑を掛けず、すべてのことに対し感謝の心を持っている点だ。私たちが一番多く耳にした言葉は「すみません」、「ありがとう」である。

私たちは、このような習慣や振る舞いを彼らから学ぶべきだ。

○今回の訪問で一番印象深いのは、国民の素質の高さだ。その素質はおもてなし、愛国意識、環境保護、ルールに従う国民性とさまざまな面に表れている。

今回は私にとって日本に訪れ、日本人と至近距離で触れ合う初めての機会だった。今までは日本への理解は、インターネット、新聞、雑誌の情報によるものだった。微妙な両国関係からか、私の日本に対する印象はさまざまで、「体験がなければ発言権はない」と思い私は日本にやってきた。

私はテコンドーを習ったことがある。「礼に始まり礼に終わる」がテコンドーの真髄であるが、日本人はこの韓国文化を徹底的に表現している。日本に着いた時から、受け入れ側は真心を以って歓迎してくれた。想像がつかなかったのはこの熱烈な歓迎ぶりが178時間後の今も続いていることだ。訪問中、受け入れスタッフに限らず、すれ違った知らない人からも何か迷惑をかけられることがあれば「すみません」という言葉を掛けられた。お辞儀をする必要は全くないと私は思うが、「おもてなし」の素質は敬服に値し、我々中国人が反省すべき点である。

次に言えることは愛国の素質だ。日本が私に与えた印象は、「個人の利益が組織の利益と衝突した時、個人は間違いなく組織に従う」ということで確かに実践している。外国人の私から見れば、人に出会う度、まるで「日本」に出会うようで、彼らの言動は日本を表していた。このような使命感が、私を日本好きにさせたのかもしれない。

最後に環境保護やごみの分別、分煙エリアの設置、地面に痰を吐かないこと、緑の多い点に、驚嘆せずにいられない。「規矩をもってせざれば方円を成すあたわず（一定の決まりに従って物事を処理しなければ適切に処理できない）」と言うように、日本人は「規制」を内面化しており、私たち一人一人は学ぶべきである。これからも日本と行き合い、知り合う機会に恵まれない。